

33. 学術情報メディアセンター

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 92)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 93)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- これらの活動および協働する他大学の活動が総合的に評価され、文部科学省による学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点の中間評価では高評価（A評価）を受けている。さらに、7大学と国立情報学研究所で構成する全国共同利用情報基盤センター長会議の下に設置されたクラウドコンピューティング研究会、コンピュータ・ネットワーク研究会、認証研究会に情報環境機構の構成員とともに主査または委員として積極的に参加しており、情報基盤センターとしてのあり方や施策について種々の検討を行いながら京都大学の情報環境の設計・運用に役立てている。

〔特色ある点〕

- 学術情報メディアセンターは、「学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点」の一員として、スーパーコンピュータを全国の大学等の研究者に供するとともに、さまざまな共同利用と共同研究、及びそれらの支援活動を展開している。平成24年度からは、スーパーコンピュータ「京」を中核としたさまざまなスーパーコンピュータの結合体である「革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ」の一員としても、高性能計算環境を利用した研究を支援している。共同利用・共同研究に関しては、スーパーコンピュータの利用者数が第3期中期目標・中期計画期間中を通じて高い水準で推移している
- 京都市教育委員会と京都大学学術情報メディアセンター学術データアナリティクス研究室との間で締結している「未来型教育 京都モデル実証事業に関する協定書」に基づいて、内閣府戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）／ビッグデータ・AIを活用したサイバー空間基盤技術（学習支援技術）、及び文部科学省の学校における先端技術の活用に関する実証事業等を通して地域連携研究活動を行っている。
- 欧州委員会（EC）が実施するHorizon2020での日欧協力の枠組みにおいて、情報通信研究機構（NICT）の委託研究として、日欧4か国（フランス、イタリア、オランダ、日本）の研究チームにより、高度なICTロボティクスを用いた高齢者支援サービスのアジャイル型共創開発手法を定義し効果を実証する国際共

同研究を実施している（研究期間：平成 28 年 11 月から令和 2 年 3 月）。

- 平成 22 年度に文部科学省共同利用・共同研究拠点として「学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点」の活動を開始し、平成 28 年度より 2 期目の活動を行っている。各センターが有する人的・物的資源と技術を活用した大規模な計算科学・計算機科学に関する共同研究を公募し、多数寄せられた研究提案の中から採択・実施している。平成 30 年に行われた拠点の中間評価では高評価（A 評価）を受け、「ネットワーク型拠点として、それぞれの大学の特色を生かした計算サービスを提供している。国際化、産業界との連携、新分野との協力などを進めている。」との評価コメントを得ている。さらに、平成 24 年度から開始した「革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ」においてもその構築に主導的な役割を担い、革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ利用公募研究を実施している。また、9 大学および 3 国立研究所・センターと共に革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ第二階層を構成し、フラッグシップ京（次期・富岳）だけでは対応できない計算需要に応えるとともに様々な研究者の育成にあたっている。学術情報メディアセンターで実施された学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点ならびに革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラでの共同研究のほとんどは、学術情報メディアセンターで生み出した種々の成果を活用したものである。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に優れている研究業績があり、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。